

## 「建設」創刊當時の回顧

幹 事 米 田 正 文

本會の機關誌「建設」千部突破號を發刊するにあたり其の創刊當時を回顧して見ますとまことに想出懐しいものがあります。

康德2年の5月頃でありました、當時國道局に於きましては國道の建設に苦慮健闘する傍ら、末期の國道5箇年計畫の立案中でありましたので、この老なる將來の國道建設を如何なる方法で確實に、而も最も經濟的に施行するかといふことが當面の問題でありましたので、當時國道局の計畫科長であつた江守氏と相談の結果、道路に関する研究會をやらうではないかとの事になり、2人色々考へた上、道路研究會といふものゝ研究要綱、研究會の會員範圍、會則其他必要な事柄に於いて案を練り、滿洲道路研究會設立趣意書、會則案、調査研究事項案等を作りまして、康德2年7月13日丁度土曜日でありましたが、その日の午後2時から今の中銀俱樂部に於て創立準備委員會を開きましたところ、坂田、本間、原口、近藤(安)、溝江、武藤、江守、中島、近藤(謙)、伊地知、伊藤、米田、松本、辻川、津田の15名の出席があり、席上近藤安吉氏を座長に推して會則案の協議、會員範圍の協議、研究會の設立決定といふ順序で議事を進め、滿場大體原案通りに賛成されて、こゝに初めて滿洲道路研究會の設立が決定いたしました。

會が設立されるや早速會則、會長の選舉、幹事の選出と一瀉千里で可決されて研究會の進むべき方向が決り、會長には直木博士を推戴することに決定、幹事には江守、伊藤、伊地知、米田、坂田、津田の6名が指命されました。

そして此時定められた會の方針は、毎月1回例會を開いて講演會を催しそれを討論するといふ方法を目標とし、この事務は當時の國道局新京建設事務所内で取扱ふことになりました。

斯うして出来上つた研究會は會員約50名で、毎月1回宛講演討議を熱心に行ひまして、常に盛んで大いに議論を鬧はせたものです。

會場は中銀俱樂部のこともありましたが、經費の関係で後には土建協會の3階を無料で借りて行つたこともあります。

その内に吾々の研究のみではいかぬ、現地に働いてゐる人の技術的向上こそ今日最も要求されてゐるといふので、翌康德3年1月中旬に新京記念公會堂で第1回道路講習會を開催致しましたところ、嚴寒中にも拘らず全滿から200名の出席者があり、これも又極めて有意義な會合であつたので、その後毎年催さうといふ事になり、現在まで毎年やつてゐるのであります。

會員も次第に増加し會の内容も整備される様になつて來るにつれ、全滿技術者の向上は1年1回の講習會だけでは不十分であるからその不足を補ふといふ意味で、康德3年の3月頃に研究會の誌を發行する計畫を樹てまして、愈々同年5月から第1號を出すことになり、誌名も滿洲の道路

にふさはしい「建設」といふ誌名を採用することになり、鄭孝胥閣下に建設といふ字を書いて頂いて表紙に入れることにしたのであります。

現在誌上にのせてある建設といふ字がそれであつて、今は亡き鄭閣下の徳を偲んでゐるのであります。

其後道路に関する研究のみでは會員の要望を満すことが出来なくなり、遂に康徳4年4月には研究を土木一般に及ぼすこととなり、會の名稱も滿洲土木研究會と改稱することになつたのであります。

「建設」は御承知の様に創刊號以來隔月發行として來たのでありますが、其後15號を發行しました今日では、最早や隔月では満足出来なくなり、愈々本年7月號からは毎月發行といふ運びになりました。

かくの如く本會は、創設後僅か3箇年餘にして躍進に躍進を重ね、會員數は千名を突破し月刊雜誌を發行し得る様になりましたことは、創設當時を顧て誠に隔世の感があるのでありまして、實に感慨無量であります。

これらは役員並に會員一同の努力によるは勿論であります、道路研究會設立以來終始絶大の援助を下さつた、元國道局前土木局即ち現交通部當局並に各關係諸官廳及び民間各會社の御盡力に依るものでありまして、茲に厚く各位に對して感謝致す次第であります。

### 滿鐵工業品標準規格合冊

#### 1 部 定價11圓也

尙各位の御都合に依つては分冊にしてもお願ひいたします。

### 滿鐵設計基準(土建)

#### 1 部 定價1圓80錢也

豫て編纂中の滿鐵設計基準は漸く印刷完了、一般に頒布する事になりました。内容は土木建築のもので關係技術者必携の寶典です。

其 他 滿鐵工事標準仕様書・滿鐵標準圖

滿鐵工作標準仕様書

等あります。詳細御問合せ下さい。

發 賣 所 社 團 法 人 滿 洲 技 術 協 會

本 部 大連市東公園町 35 電 2—1931. 3530番  
振替番號大連3944番

新京支部 新北京安南胡同 701 電 2—3845番

奉天支部 奉天平安通 13 電 3—3931番